

遠 神

佐 伯 梅 友

万葉集に「遠神」という語が二か処出ている。一つは卷一の五番の長歌の中で、もう一つは卷三の二九五番の短歌の中である。いずれも似たような用法になつてゐる。

遠神 吾大王乃 行幸の山越す風の (五)

遠神 我王之 幸行処 (二九五)

最近卷三のほうの歌を教室で扱ふ機会があつて、沢瀉博士の注釈を参考したところ、通説と違う解釈が行なわれていることを知つた。それは卷一のほうでこまかに論じられてゐるので、次にその論を引用してみよう。

代匠記に「遠つ神といふは、凡人の境界に遠ければいへり。」と云ひ、考にも、「人に遠くして崇也」と云ひ、以後の諸注皆それに従つて疑はなかつたが、全註釈に「もし過去の天皇の行幸をいふと解するならば、遠つ神は、過去に出現して、今は神となられた方の義に解すべく、語義から云へば、その方が自然である。題詞に、幸讃岐国安益郡之時とあることが、どの位の権威を与へるかも、従つて問題となる。これが歌詞に依つて作られた題詞で無いとも保証せられない。」と所見が述べられた。

等富都比等 (五・八五七) 遠妻 (七・一二九四)

などの「遠」は距離的に遠い意に用ゐられてゐるが、

遠都神祖 (十八・四〇九四) 遠天皇祖 (文武紀、元年) 遠天皇 (聖武紀、天平廿一年)

などは時間的に用ゐられたもので、遠つ神もさういふ風に解するのが自然だと思ふ。遠妻の如きも身辺にあるべき人が何かの事情で遠方にゐるといふだけの事であつて、「遠つ神」といふ語から「凡人の境界に遠」と

か「人間より離れて遠くにいます」といふ風な考へ方に従ひ難いものを感じるのはわれわれの主観だけではないやうに思ふ。さうするとこの行幸はこの作の時のものでないといふ事になる。集中に於ける「遠つ神」の一つの用例、

住吉の岸の松原遠神我が大君の行幸どころ（三・二九五）

もさういふ意に解いた方がよいやうである。

こう言われて見ると、なるほどと思われる。総索引で「遠し」という語の關係のいろいろな例をながめても、空間的にか時間的にかの例ばかりのようである。「遠つ国黄泉のさかひに」（九・一八〇四）というのはちよつと普通とは違う感じを受けるが、やはり意識的には空間的にかほうのつもりなのであろう。したがつて「遠つ神」だけが、通説によると、時間的でもなく空間的でもない特別な見方ということになる。

ところで、沢瀉先生が、「遠つ神」の通説を否定される理由の中には、空間的にかの場合でも時間的にかの場合でも、言う人をもととして隔たりのあることを言つているのに、遠つ神の場合だけは、人間をもととして言つているという、基準のおき方の違いに不自然を感じられたということもあるのではないかと思われる。もしそうだとするならば、それはやはり、言う人をもととして質的に隔たりのある意を言うのだと考えれば、少なくとも遠いという基準が違うという点だけは消えるのではなからうか。

右のように考えれば、難点は、そのように質的に言つた例が他に無いという点だけになるが、この点は許されてもよかりそうな気がわたくしにはする。というのは、「わが大君」というのを、作者の同時代でない、遠い過去の天皇と解することに、わたくしは疑いを抱くからである。

「おほきみ」とあわせて考えられるのは、「すめろぎ」という語である。この違いを述べたものに、荒木田久老の万葉考槻乃落葉の別記の説があり、一般に認められているようである。そこには、

おほきみとは、当代天皇より、皇子、諸王までを申称なり。

須米呂岐とは、遠祖の天皇を申奉る称なるを、皇祖より受継ませる大御位につきては、当代をも申事のあると

天皇と書て、須美呂岐ともよむ例のあるによりて、後人ゆくりなく、須美呂岐と申も、於保岐美と申も、ひとつ言と心得て、大皇と書るをも、皇と書るをも、須美呂岐とよみ誤れるぞ、おほかりける。

といつて、それぞれ多くの例をあげて、たしかめている。ところで、わたくしは、スメロギとは、遠祖の天皇を申す、という考え方はどうかと思う。スメロギというのは、天下を統治されるという地位を主としていう称ではないかと考えるのである。天下を統治されるという地位を主としての称であるから、過去の天皇にも、現在の天皇にもいふのではないかと思うのである。それに対して、オホキミのほうは、言う人が君として仕え、または仕えたかたを言うのではないかと思う。(輕皇子など)に対して、長屋王などの「王」をオホキミというのは、ここでは別問題とする。)ことに、ワガオホキミ・ワゴオホキミなどというのは、言う人が親しく仕え、または仕えたという気持ち強いのではなからうか。

卷四、天皇之行幸乃隨意(五四三)、卷六、天皇之行幸之隨(一〇三三)、とあるは、卷三、我王之幸行処(二九五)、卷六、皇之引乃真爾真荷(一〇四七)、とある例にて、当代天皇を申奉る言なれば、是はおほきみとよむべきなり。

と別記に言つているのと、前にあげた「おほきみとは、当代天皇より、皇子、諸王までを申称なり」というのとあわせて、久老も、自分が仕えなかつた過去のそれらの方をオホキミということはなかつたと考えていたと見てもよいのではないかと思うのであるが、とにかくわたくしとしては、自分が仕えない過去の天皇を、ことにワガオホキミというように言うことは無かつたのではないかと思うのである。そうして、ワガオホキミをこう考える、と、遠つ神が、他に同様な例はなくても、自分と質的に大きな隔たりのある神という意に考えないとぐあいが悪くなるというわけである。オホキミに対するわたくしの考えが、否定されるような材料が示されれば、はかなく消えなければならぬ考え方ではあるが、とにかく一つの考え方として御批判を仰ぐ次第である。